

---

研究課題

# 観点別スピーチコンテストで育成する 英語によるコミュニケーション能力

---

副題

～小中英語部会 6教科による連携したICT活用～

---

キーワード

外国語教育, 小中連携, パフォーマンス評価

---

学校名

西大和学園カリフォルニア校

---

所在地

2458 Lomita Blvd., Lomita CA U.S.A. 90717

---

ホームページ  
アドレス

<https://www.nacus.org/>

---

## 1. 研究の背景

本校は2014年度よりグローバル化に対応する人材育成を推進するため、小中学部の実技教科における英語イマージョン教育、コミュニケーションな中学部外国語教育、実用英語技能検定に対応した活動を導入し、教育課程の大幅な再編成を実施してきた。例えば、グローバル人材に欠かせない社会貢献意識(グローバル人材育成会議 H23,6月)を育成する活動として、中学部外国語科では、グローバルリーダーのスピーチを調べて発表する活動を行った。また、相互理解(同会議 H23,6月)を育成する活動として、小中学部イマージョン家庭科で「健康な食生活」の学習と関連させ米国文化を学び、英語によるプレゼンテーションで学習のまとめを行った。しかし、2014年度の実践では、ICT活用方法や育成するコミュニケーション能力を教科間で横断的に評価しておらず、各発表も学級内の活動として行われたため、一元的な教育で終わっていた。特にICT活用については、ノートパソコン15台、タブレット22台、プロジェクター2台、デジタルテレビ1台を幼小中3学部で使用しており、情報リテラシーを育成する体制が十分とは言えず、上記の実践も模造紙に描いた図を用いて発表を行っていた。

## 2. 研究の目的

本校の児童生徒は米国生まれ、現地校出身者、日本全国からの編入生で構成されており、英語力と情報リテラシーが非常に多様である。特に日本から編入して間もない児童生徒が、本校で実践している高度な英語活動に効果的に参加していくためには、ラインスキャナーやICレコーダーなどのICT支援が有効で、本研究を通して情報教育の指導目標の体系化も行いたいと考えた。また、これまでの実践では英語の4技能のうち「話す力の育成」が充実していなかったため、6教科からなる小中英語部会で研究に取り組むことで、「話す力」に焦点をあてたプレゼンテーション能力の評価観点を体系化することを目標とした。また、在外教育施設の教育はややもすると閉鎖的になりやすいため、本校研究を保護者、学校運営委員、そして他校に向けて発信していくことで、校内研究の体制を整え、教職員の意識改革を行いたいと考えた。

### 3. 研究の方法

#### (1) 「プレゼンテーション能力」評価観点の検討

評価部会にて、各教科で重点的に育成する力を評価観点として明確化し、スピーチコンテストの審査項目として整理した。授業研究を進める中で、より児童生徒の実態に適した評価観点に改善し「プレゼンの基礎・創造・総合」の3段階に評価観点を整理した。

#### (2) 英語部会における ICT 活用の設計

スマートテレビ・タブレット・PC・ラインスキャナー・ICレコーダーをどのように活用すれば、各教科の指導目標を達成するとともに。上記の「プレゼンテーション能力」を効果的に育成できるかを検討した。

#### (3) 学習発表会

各学期に2教科ずつ授業研究を行い、研究対象の学級で「学習発表会」を行った。

#### (4) スピーチコンテスト

「学習発表会」を行った中から自主的にスピーチコンテストに出場したい児童生徒を募り、育成したいプレゼン力を観点到審査するスピーチコンテストを各学期に1回開催した。コンテストは保護者と他学年にも公開した。

#### (5) 決勝スピーチコンテスト

上記のスピーチコンテストで優勝した6教科の代表各1名で、決勝コンテストを学園祭にて行った。

#### (6) 外部検定試験による検証

年1回行っている実用英語技能検定(英検)の結果を昨年度と比較して、技能の伸びを分析した。また、研究対象の児童生徒と研究員にアンケートをとり、成果と今後の課題をまとめた。

#### (7) 広報

研究過程は、運営委員会に随時報告し、行内掲示や学校ウェブサイトを通じて保護者に、地域雑誌を通じて一般にも広報した。

### 4. 研究の内容・経過

(1)下表は6教科の実践を一覧にまとめたものである。このうち、第8学年の外国語科は学級での発表を一般授業公開として実践したので研究内容を特記する。

教科	学年	活動内容	時数	プレゼン評価観点	情報教育の評価観点
音楽科	3	モルダウ川音楽旅行記 絵を描きながらソメタナのモルダウを鑑賞し、場面によって変わる曲の情景を説明した。	5	プレゼンの基礎力 Fundamental Presentation 発声の大きさ/わかりやすさ/元気さ・アイコンタクト・わかりやすさ/聞き手をひきつける	活用・判断：ICレコーダとスマートTVの操作に慣れ、曲の情景どのようにしたらグループで効果的に説明できるかを説明することができる。
図工	4	フォトコラージュ 自分の写真を拡大縮小し、風景画の中に遠近法を用いてコラージュする製作手順を説明した。	5	Volume/Speed/Tone, Eye contact, Organization/Positive performance	活用・表現：タブレットの操作に慣れ、友達の写真を撮影し、デジタル画像は加工ができることを知り、遠近法の作品を効果的に製作できる。
スピコン1	3,4	参加者計12名 3年生は4人グループで4年生は1人で、スマートテレビを操作して発表。司会は4年生が担当。	7		伝達：作品の製作手順や曲の情景をスマートTVを活用し、聞き手を引き付けるように(グループで協力して)わかりやすく話すことができる。

教科	学年	活動内容	時数	プレゼン評価観点	情報教育の評価観点
小学英語	6	<u>トークショー</u> ネイティブの先生方にインタビューし、先生になりきりトークショー形式で再現した。		プレゼンの創造力 Creative Presentation 発声の柔軟さ・ボディーランゲージ・効果的なキーワード/構成・道具の活用	判断・伝達：ICレコーダ・ビデオ・タブレット・PCを活用してインタビューを記録し、どのようにしたら表現豊かに記者会見を再現できるかを考えて、伝えることができる。
家庭科	5, 6	<u>クッキングショー</u> 料理をクッキングショー形式で紹介し、効果的な2人のやりとりを学習した。	7	Vocal variety, Body language, Word choice/Effective flow, Props' usage	判断・伝達：ICレコーダ・タブレットを活用して料理方法を調べ、2人のやりとりを通して、料理の手順をわかりやすく伝えることができる。
スピコン2	5, 6	参加者計18名 5, 6年生は2人で6年生は3人でスマートテレビを操作して発表した。司会は6年生が担当。	5		創造・伝達：トークショーや料理ショーを効果的に見せる画像や音をスマートTVで投影しながら、豊かな英語表現で、聞き手を引き付けるように伝えることができる。
中学英語	8	<u>ヒーロープロジェクト</u> グローバルリーダーとその英語スピーチを調べて読解し、名言を暗唱してスピーチを再現した	10	プレゼンの総合力 Mastering Presentation メッセージにこめた情熱/自信/価値/効果的な事例・暗唱	収集・表現：タブレットでリーダーとスピーチを調べて選び、ラインスキャナーで読み方を確認し、ラップトップでスピーチを効果的に構成して表現することができる。
中学ELD	7, 8	<u>ブックレポート人形劇</u> 文学作品をグループで読解し、自分の解釈と感想を人形劇にまとめて2人で紹介した	4	Enthusiasm/Assurance, Speech value /supportive ideas, recitation	収集・表現：ラップトップで本の紹介を表現し、ラインスキャナーで読み方を確認し、2人で協力して効果的に構成して本の内容を伝えることができる。
スピコン3	7,8	参加者計2名 8年生は1人ずつ、ELDは2人でスマートテレビを操作して発表した。司会は7年生が担当。	3		創造・伝達：整理されたスライドをスマートTVで投影し、豊かな英語表現で、聞き手を引き付けるように、自信をもって伝えることができる。
スピコンファイナル	3,4,5 6,7,8	参加者計10名 スピコン1～3の決勝進出者がより多くの聴衆に聞きやすいスピーチに直して発表した	5	基礎力・創造力・総合力の評価観点から抜粋	レンタル会場：担当者がスクリーン操作

## (2) 中学校外国語科 8年「NAC HERO PROJECT 2015」

時数：10時間（夏季休暇課題の下調べを除く）

活動形式：

- ・プロジェクトについて説明・プレゼンテーション・・・一斉授業
- ・各自選んだヒーローについて書かれた文献を読む・・・個人作業
- ・プレゼンテーション準備・・・個人対教員
- ・プレゼンテーション練習・・・2～3人のペアまたはグループ活動

英語力について：

滞米5年以上、現地校出身1名  
滞米2～5年、日本人学校3名  
滞米1～2年、日本人学校5名  
滞米1年未満、日本人学校1名

現地の生活には慣れており食事の注文などは英語でできるが、日常生活で現地の人々とコミュニケーションを図る機会が少なく母国語で不自由なく生活しているためか、英語の伸びは現地校出身者を除いて緩やかである。

事前準備と支援：

① 人前で話すことについて考える。

- ・過去の8年生が行ったプレゼンテーションを紹介  
(模擬オリンピック招致スピーチ・ふるさと紹介スピーチ・NAC HERO PROJECT2014)
- ・様々なスピーチスタイルを紹介し、それぞれの特徴を話し合う。  
(TED / 中高生英語スピーチ大会映像 / Steve Jobs スピーチ映像 / マララ・ユスフザイの国連演説映像 / オバマ大統領就任演説映像 / Apple iPhone プレゼンテーション映像等)

②資料の活用について考える。

- ・参考資料の探し方を紹介 (Biography.com / YouTube / Wikipedia / 図書室の偉人伝記等)
- ・タブレット準備 (Wi-Fi 設定)
- ・ミニホワイトボードの準備 (個人キーワードを拾うため、ブレインストーミング用)
- ・リーダーの使いかた、練習

## 5. 研究の成果

(1) 外部検定試験による検証

下表は研究対象の児童生徒の成果比較をまとめたものである。スピーチコンテストに出場することで表現する機会が増え、上位の級を受験したにも関わらず、書く問題での点数が伸びていることがわかる。

生徒	受験年	合格級	文法	読み	聞く	書く
A (小4)	2014	2級	70	70	83	100
	2015	準2級	90	100	96	80
B (中2)	2014	準2級	90	90	100	80
	2015	3級	90	100	100	70
C (小5)	2014	準2級	65	75	83	60
	2015	3級	60	60	93	80

(2) 子供の変化 (アンケート結果より)

スピーチコンテストに参加して

- ・自然に早いスピードで、会話をすることができるようになった。
- ・今までよりは感情をこめて英語を話せるようになった。
- ・多くの人の前で発表するという貴重な期間を得ることができた。
- ・ジェスチャーを使ったり、ゆっくりと意味を理解しながら話すことができた。
- ・英語で表現する力や原稿作成力がついた。
- ・練習をしたおかげで当日は前を向いて発表することができた。
- ・限られた時間の中でやり抜く力がついた。
- ・難しい発音を友だちから教えてもらったり原稿を一から作ったりしたことが成果だと思う。
- ・何度も英語の原稿を読んだことで話す力が上がった。また、人の前に出て話す練習になった。

## ICT 活用について

- ・パワーポイントのアニメーションを用いて物語を描いたので、本の内容理解が深まった。
- ・自分自身がスピーチをしているようすをパソコンで観ること、聞くことができたのでよくことがわかった。
- ・タブレットはヒーローを調べる時に何度も役立った。
- ・トークショーのようすなど本で調べることができないものを調べることができた。
- ・タブレットで撮った写真を使うことで、普段の図工ではできない作品を作れた。
- ・会場全体に声が響き、大きな画面でフルーツサンドの作りかたを見せることができた。

アンケート	よくできた	できた	まだできない
声の大きさを大きく、元気よく、わかりやすく話せるようになりましたか？	4	3	
声の調子を上げたり下げたり、リズムよく話せるようになりましたか？	5	2	
手を動かしたり、体も自然に動かして話せるようになりましたか？	3	1	2
原稿をただ読むのではなく、気持ちを込めて発表できましたか？	3	3	1

### (3) ICT 活用の効果

- ①第3学年では、ICレコーダーとして使えるマイクを活用して、スピーチの練習を行った。一つの活動に集中したり、順番に協力して活動することが難しかった学級であったが「マイクを持った人がレコードが終わるまで話す」という自然な決まりが生まれ、効果的に練習を行うことができた。
- ②写真を撮ってもそれを自分で加工して活用することまで体験していなかった第4学年では、自分の写真を拡大縮小して遠近法を用いて絵画に活用することで、創造的な作品が数多くできあがった。
- ③5.6年の家庭科では、グループで発表する料理を調べる活動にタブレットを活用した。複式学級で人数が多く学級なので、このような調べ学習をPCではなく、タブレットで行えることで効果的な授業計画を組むことができた。
- ④小学校英語活動では、ネイティブの先生方にインタビューしたビデオをPCに取り込み、1台のPCにスプリッターをつけて3人でヘッドホンで聞きながら、先生方の発音・抑揚・ボディーランゲージを学習したり、自分が英語で話している様子を分析することができた。また、ネイティブの先生役の児童は、先生の声タブレットに取り込み、何度も聞きながらスピーチを練習することができた。
- ⑤ELDと外国語科では、米国の文学作品やグローバルリーダーの格言を教材として扱ったので、多くの未習単語や表現を読解しなくてはならなかった。また、各生徒が個別の題材を選んで学習したので、全体指導が行なえなかったが、ラインスキャナーを用いることで、生徒自身で単語の意味や読み方を調べて学習をすすめることができた。



## 6. 今後の課題・展望

### (1) 第二言語習得理論と小中学部への対応

第二言語習得理論にもあるように、英語力は日常言語の習得に平均で3から5年、学習言語の習得に5から9年を要し、言語力の習得には「学習者の自主的な動機」が不可欠と言われている。本研究では、学習言語の活用が必要で、日本から編入して間もない児童生徒も実践に参加できるのかどうか、また「話す力の育成」をこれまで主たる研究課題としてこなかった本校において、スピーチコンテストに自主的に参加する児童生徒がいないのではないかと思われた。しかし、小学部においては、英語力に関係なく在籍1年未満の児童も参加を自主的に希望し、簡易な表現を活用して、在籍が長い児童や米国生まれの児童とともに、プレゼンの基礎や創造力を伸ばそうと、生き生きと発表することができた。中学部については、現地校出身者は抵抗なく人前でプレゼンテーションを行えるため、本校に転入して間もない生徒が所属する ELD のクラスで実践を行った。このため、学級内での発表には抵抗がなくても、より多くの人前で英語でプレゼンテーションをすることへのためらいが見られ、自主的に参加する生徒が小学部より少なかった。今後は、中学から編入してくる生徒については、第1段階である学級での発表を目標とするなど、各生徒の実態に合わせて、段階的な指導をしていくと良いのではないかと思う。

### (2) 実践の定着と年間指導計画

英語を指導する教科である小学校英語活動・中学外国語科・ELD では、本研究を毎年実践できるように、年間指導計画に組み込む必要がある。一方、イメージ実技教科では、教科内容の指導の他に英語でのプレゼンテーションを指導する必要があり、この分の時数を来年度以降どのように確保するのかを検討しなくてはならない。いずれにせよ、2014年度のように、実技教科の学習発表を個々の教師が学級内で任意に行うのではなく、他学年や保護者にも公開していくことは、今後も継続して行っていきたい実践である。

## < 参考文献 >

Principles of Language Learning and Teaching H. Douglas Brown

Solving the Assessment Puzzle Carolyn Coil Dodie Merritt